

授業で使える当館所蔵地図

No. 59 『濃州関ヶ原合戦図』

作成年：江戸時代（作製年不明）

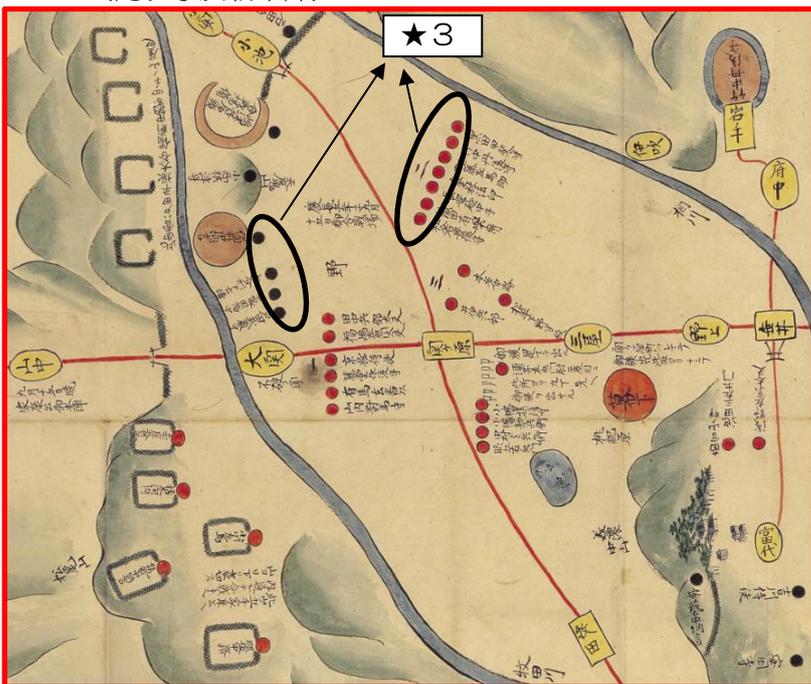
サイズ：103×188cm

作者：作者不明



（関ヶ原決戦布陣）

（岐阜城の戦い布陣）



※北を上にしてあるが、文字が逆になったり、横になったりしている。昔の地図は皆で地図を囲んでみるため、上が北というきまりで描かれていない。日本で北を上にして地図が描くことが慣例化してくるのは、明治以降である。

【解説】

関ヶ原合戦は、徳川家康が豊臣秀吉なきあとの政権掌握を目指して起こしたもので、慶長5（1600）年9月15日の関ヶ原決戦に至る諸戦の総称である。本図には、9月15日の関ヶ原決戦時のみならず、それまでの美濃における諸戦（★2）の武将たちの対陣配置図も描かれている。合戦の展開を描いた合戦絵図とか合戦絵屏風ではない。日時が違うものとか時間的ずれのあるものを併せて同一画面に描いている。その点は、合戦絵図・絵屏風でも見られる。本図では、徳川家康率いる東軍が赤丸で描かれ、対する西軍は黒丸で描かれている。（★3）

本図は、岐阜県歴史資料保存協会編刊「関ヶ原合戦と美濃・飛騨」の付図として収録されている「関ヶ原合戦御陣場図」とよく似ている。その付図は天明7（1787）年に写したと銘があり、恐らく本図はかなり後年の写図と考えられる。なお、天明7年写図には「ふけ」（深田）とか「町人小屋」（庶民避難地）なども描かれていて、赤坂付近以西の地理に明るい者が作製したと考えられ、地元の領主竹中家で作製されたのであろうと推測されている。

本図や天明7年写図には、合戦直後の慶長7（1602）年に設定される公街道中山道の路線が東西を貫いており、中山道は合戦以前から既に東西往還道として通用していた街道であったことをうかがわせる。

★1 里程

関ヶ原の戦いのポイントとなる場所からの距離（里程）が記されている。

例えば：岐阜より犬山へ5里・大垣より赤坂へ1里半 など

★2 美濃における緒戦

美濃における緒戦とは、8月中旬から9月にかけて以下の戦いがある。

- ・大樽川（おおくれがわ）の戦い→現在の安八郡輪之内町あたりでの戦い。大藪（おおやぶ）の戦いを経て福束（ふくつか）落城。東軍の勝利。
- ・米野（こめの）の戦い→羽栗（はぐり）郡米野村（現・笠松町）を中心にした戦い。東軍の勝利。
- ・竹ヶ鼻城の戦い→現在の羽島市竹鼻あたりでの戦い。竹ヶ鼻落城。東軍の勝利。
- ・岐阜城の戦い→金華山、岐阜城での戦い。城主織田秀信（信長の孫）が投降し、落城。東軍の勝利。
- ・郡上八幡城の攻撃→東軍・西軍に分かれた武将の戦い。和議が成立し兵を収める。
- ・河渡川（ごうどがわ）の戦い→岐阜城攻撃に参加しなかった東軍武将が西軍を呂久川（ろくがわ）まで追撃した戦い。東軍の勝利。
- ・杭瀬川（くいせがわ）の戦い→西軍が勝利した数少ない戦い。

★3 東軍・西軍

昔から東軍・西軍と呼ばれたわけではない。明治の後期、日本の陸軍軍令を司っていた「参謀本部」と呼ばれる機関が戦史を作成しており、江戸を基準に西と東が認識されていたため、東軍・西軍と付けられた。

【用語について】

- ・濃州（じょうしゅう、のうしゅう）

美濃国（みののくに）のこと。美作国（作州）との重複を避けるため二文字目を用いるが、古くは「美州」とも呼ばれた。「のうしゅう」と読むのは江戸時代後期以降（「濃」の漢音は「じょう」で、「のう」と読むのは慣用音とされる）。

【利用の例】

○関ヶ原の戦いの学習の導入に利用することができる。

→歴史的分野の「江戸幕府の成立と鎖国」において、関ヶ原の戦いを地図上で確認することができる。

→関ヶ原の戦いといっても、いくつもの前哨戦があったことを知ることができる。

→授業で扱う「徳川家康」「石田三成」などの名前を探すことで、興味・関心を高めることができる。

○当時の村名を知ることができる。

→村名などが楕円の中に具体的に表記され、位置関係を理解できる。

○当時の街道が分かる。

→図を東西に横切る中山道や郡上街道など、江戸時代が始まる前ではあるが、当時の主要街道について知ることができる。

【参考文献】

「関ヶ原合戦と美濃・飛騨」 岐阜県歴史資料保存協会 2000（平成12）年発行

「図説 関ヶ原の合戦」 岐阜新聞社 2000（平成12）年発行

「歴史群像シリーズ 関ヶ原の戦い」 学研 2006（平成18）年発行